

作品タイトル

今日も私は生きている

著者名

瑞乃木　しのぎ

あらすじ

私は、ずっと寸分違わぬ今日を繰り返している。私をタイムリープさせている張本人である悪魔でさえも痺れを切らすほどに。私がタイムリープを繰り返す理由は、病気から死を意識した自分を救ってくれた少女を守るためだった。少女の言葉から覚悟を決めた私は、また明日へと歩みを進めていく。

特記事項

生きとし生けるすべての人に、どうか明日が来て欲しいと思って執筆しました。

本編の文字数

四九七七文字

目を覚ました私は、カーテンの隙間からこぼれる日差しに少しだけ目を細めた。いつもと同じように、枕元に置いてあるスマホの画面を確認すると、日付は十月十三日を示している。いつも通りの朝に、私は安堵する。

「良かった。今日も私は生きている」

私は今日で幾度目かの十月十三日を迎えている。私が何度今日の朝を迎えたか分かる人間は、この世にはいないだろう。

もう誰も数えてなどいないのだから。

午前六時、軽快なリズムを刻むアラームが部屋に鳴り響くと、私はいつも通り三度目の音楽でアラームを止める。ベッドの右側に右足から降りると、すぐに部屋のカーテンを開け背伸びをする。一息ついたのも束の間、すぐに先日購入したケトルでお湯を沸かし、お気に入りのトースターに食パンをセットしスイッチを入れた。仕事着に着替えた私は、沸き上がったお湯でインスタントのコーヒーを淹れ、食パンには愛用のバターナイフでイチゴジャムを均等に三回に分けて塗った。

窓向きの椅子に座り、コーヒーを一口飲んだ後、パンを五口で平らげると最後にコーヒーをゆつくりと胃に流し込む。

食器洗いが好みではない私は、夜その日出た食器をまとめて洗うことにしている。午前六時三十分、シンクの左側に食器は重ねておいた。

仕事の支度を済ませると私は、右足から靴を履き、午前七時ちょうどに家を出る。この時、玄関に置いてあるデジタル時計とスマホの時計が左手首に着けている腕時計の指す時間と相違ないか確認してから私は会社へと向かう。

会社へのルートは決まって少し遠回りをする。私の勤めている会社は、午前八時三十分始業なのだが、私は午前八時に出勤するようにしている。その時間ちょうどにデスクに着けるよう時間配分を考えたコースを選んでいる。本来、会社からは徒歩十五分の距離なのだが、四十代も後半に差し掛かった私は、健康のために毎朝一時間掛けて通勤するようにしている。この習慣を始めてからお腹周りにはみるみるすつきりしていったのだから嬉しい限りである。

「おはようございます」

私は、いつも午前七時三十分頃差し掛かる県立病院の門の前で、一人の医師に挨拶をされる。彼もこの時間、健康的なことに門付近の広場で始業前のストレッチをしているため、毎朝同じ時間にここを通る私に欠かすことなく挨拶をすることとなるのだ。無論、面識がないわけではなく、私が持病の検査でいつも訪れている病院なので何度も顔も顔を合わせている。そのため、向こうも無視するわけにもいかないのだろう。私も笑顔でいつもと同じように挨拶を返す。

「おはようございます。今日もいい天気ですね」

「そうですね。なかなか雨が降らないからダムの水率が心配ですけど、子ども達は喜んでますよ」

彼は、難病の子ども達を多数抱えていることもあり、いつも会話の中には、子ども達の事が含まれる。客観的に見てもいい医師であることは間違いないだ

ろう。

「ははは、それは嬉しいことですね。では私はこの辺で」

「出社時間に狂いが生じるといけないため、私は話半分で会話を切り上げる。会社のデスクに着くとちょうど腕時計は午前八時を指していた。

昼休憩が終わると、私は外回りに出かける。かといって今日は、取引先への挨拶が一件入っているだけだ。約束の午後二時には受付を済ませ、通された小会議室で挨拶が交わされる。

「今年もありがとうございます。来年も引き続きよろしくお願いいたします」  
「いやあ、近頃景気が悪いでしょ。いくらあなたが良くしてくれてるとはいえやっぱりそろそろ少し考えさせてもらおうかなと思とるんですよ」

「まあそう言わずに、まだ時間もありますし、じっくりお話を詰めていきましよう……」

耳が痛い話だが、説得できるだけの材料は私にはない。慰め程度に次のアポを取り付けて、会社への帰路に就く。

午後三時十分を迎えたところで、朝も通った病院の前を通りかかる。すると、少女の透き通るような歌声が聴こえてくる。私は、およそ一年前からほぼ毎日この歌声を聴いている。今日みたいな晴れの日は門付近の広場で歌っている少女の姿を横目に見ながら、雨の日はどこかの病室で窓を開けて歌っている少女の姿に思いを馳せながら、私はゆつくりと会社へ向かうのだった。

「この取引先との取引が終わったら、君はもうクビね」

部長はそう言うと、書類を叩きつけて喫煙所に歩いて行った。私は部長の姿が見えなくなるまで、頭を下げたままだった。

席に戻ると、呆れた顔をした後輩に話しかけられる。

「部長は先輩が妬ましいだけですよ」

「そうは言ってもこの取引がなくなると、うちが厳しくなるのは確かだよ」  
後輩は大げさな手ぶりで続ける。

「先輩がいなかったらこの取引自体もうないようなもんでしょ。誰のおかげでこの会社が続いてると思ってるんでしょうね」

「はいはい。ならそろそろ大口の案件捕まえてきてくれたんだろうな」

おっとと言うような表情をしながら後輩は、自分の仕事に戻っていった。このまま明日が来れば、私もこの会社も、この取引の終了と同時に終わってしまうのかなと思いつながら、私も自分のパソコンと向きあった。

午後二十二時三十分私は今日すべき仕事を終えると、腕を組んで考え込んだ。今日の取引先との案件をどうすべきか。プレゼン資料を作成し、今後の見通しとともに頭を下げに行けばあるいは、部長を説得しもう少しいい条件を整えられればあるいはといったところだろうか。相手は医療設備を扱う企業だ。中途半端な条件では、人の命にも関わってしまう。私は、部長の顔を思い浮かべ、

そして全てを諦め帰路に就いた。

私は、コンビニで購入したおにぎりや唐揚げを遅い夕飯とした後、三十分間風呂に入り、就寝前のホットミルクを飲んだ後、食器を全て片付けて午後二十三時五十分に眠りについた。

私はその日から、ずっと同じ一日を繰り返している。  
時間さえも寸分違わぬように。

「もういい加減にしてくれないですかね」

悪魔と名乗る黒いスーツのその女は、丁寧さに苛立ちを交えながら私に訴えかける。私は歯牙にもかけず、いつも通りコーヒーとパンの準備をする。おつと、仕事着に着替える時間がずれるところだった。危ない危ない。

「普通は、タイムリープしてるなって思ったらみんなどうにかして次の日に進めるよう頑張るんですよ」

一口目のコーヒーを飲み、パンを食べ始めると悪魔は呆れたように呟いた。  
「そうやっていろんなことをするうちにきつかけを掴んで未来を手に入れた後、私は悲しい顔をしながら去るのが常だというのに。あなたはもう何年同じ十月十三日を繰り返すんですか……」

パンを五口で食べると私は最後にコーヒーをゆっくり胃に流し込んだ。さあ、食器をシンクに重ねておかねば。

「そうやって！いつも寸分違わずに！返事もしてくれない！」

悪魔の悲鳴をよそに、私は仕事の支度を済ませ、右足から靴を履き、午前七時ちようどに家を出た。

「もうあなたに警告を始めてから一年以上経ちました。本来私は手出ししてはいけません。しかしながら、私のしたことで恐縮ですが、このままでは誰の時間も進みません。然らば不肖ながら最終手段に出させていただきます」

悪魔はそう言うと、せつせと支度を始めた。

それからの悪魔は単純だった。

毎朝の医師との軽い挨拶に乱入して会話を展開しようとして失敗したり、取引先との挨拶についてきては私以上に頭を下げようとしたりする。挙句の果てには、柔道で国体出場経験のある部長に掴みかかって返り討ちにあっていた。少なからず悪魔の影響で今までと全く同じの毎日とまではいれないが、何が起こっても自分の行動は寸分も変わらず続けている。

悪魔のせいで私の毎日が変わってしまったわれないか心配することは多いが、今のところ問題は生じていない。

今日も悪魔は、私の毎日に干渉しようとしてから回っている。私はそれを横目に見ながら、いつも通りの十月十三日を重ねていった。

そんな私が、悪魔に関わらざるを得なくなったのは、その数か月後の十月十三日のことであった。

「お嬢さん。ここで歌うのはやめていただけませんか？」

悪魔は、病院の広場で歌う少女にそう言い放ったのだ。

「迷惑なんですよ」

困惑し、今にも泣きだしそうな少女を目にした私は、思わず悪魔に掴みかかってしまった。悪魔のように笑う悪魔を見ながら、数年にも及んだ私のいつもの十月十三日は、こうして崩れ去ったのだった。

私が死にたいと思ったのは、一年以上前のことだった。

目に見えるようなブラックな会社での日々はもちろんのこと、部長のパワハラだけならまだしも、数十年続いた会社の存続が、一社員である自分の肩にかかっているという事実が私を狂わせた。

朝、いつも通り目を覚まして、会社への道へ足を踏み出すことができなかつた。おかしい。どう歩いても会社社に辿り着かない。

「おそらく適応障害ですね」

病院で医師にそう言われた私は、「そうですか」と言うだけで特に何の感情も湧かなかつた。それから何度か通院を続けたが、症状は一向に改善しなかつた。もうこころ辺でいいかな。そう思った私に聴こえてきたのが、あの少女の歌声だったのだ。

それは決して上手いとは言えない歌声だったが、私には実に綺麗な透き通った声に聴こえた。悪魔のように文句を言う人がいないこともなかつたが、気づけば皆、少女の歌声に聞き惚れるようになっていた。私に、改善の兆しが見えたのは、心から涙が溢れたのはその時だった。私は少女の歌声に救われたのだ。医師から少女がこのままでは歌えなくなると聞いたのはその後の事だった。少女の病気は、後一年もすると声が出せなくなってくるとのことだった。私の治療の前進のきっかけとなったこともあって、普通なら許されることではなかつたが、医師はそう教えてくれた。私が担当している医療機器の企業が、その病気を治療するための医療機器を開発していることも。運命だと思った。

私は翌日から仕事に復帰した。他でもない少女のために。取引の打ち切りと、それに伴い医療機器の開発が継続困難になるかもしれないことを知ったのは、そのわずか数日後の話だった。

「あなたは、今日が終わらなければこの子がずっと歌っていられると思ったのでしょうか」

悪魔はそう言って憐れむように私を見た。その通りだ。そのために、タイムリープした日を寸分違わず繰り返した。決して何も変わらぬよう。自分が生きて同じ日を繰り返していれば、ずっとあの子が歌っていられるのだから。

「そうしないと、この子はもう歌を歌えなくなるんだ」

私は、声にならない声でそう呟いた。

「取引を継続させればよいではないですか。そのために頑張ればよいではないですか」

そんなことはわかっている。悪魔は、理解したように呟いた。

「あなたは、それを諦めてしまったのですね」

そうだ。私にそれはもうできない。だって、だって私は……。

悪魔は、溜息をついてその場を去ろうとした。

「おじちゃん。あたしの病気が知ってるの？」

少女は私を見て、はつきりとした口調でそう言った。

「ああ、偶然聞いてしまったね。おじちゃん君の歌声のファンだったんだ。

だからどうしても……」

「大丈夫だよ」

少女は、胸をどんと叩いて、私の言葉を遮りながらそう言った。

「病気を治す機械も作られてるんだって！それにあたし、歌えなくなってもまだまだやりたいことたくさんあるもん」

少女の声は震えていた。

「先生が言ってたよ。生きていればいろんなことができるんだって。あたしにもいろんな明日が来るんだって！」

少女はそう言うと同病棟に向かって走って行った。私の心にわずかな衝動を残して。私は、愚かな私は、また少女に希望をもらったのかもしれない。

「あんな少女でもしっかりと明日を夢見ながら病気と闘っているんですね。あなたはあの子の何に心を動かされたんでしょうねえ」

悪魔は悪魔のような笑顔でそう言うのと、軽やかな足取りでどこかへ歩いて行った。

涙を拭い、悪魔の背中を睨みつけた私は、まるでいつもと同じ毎日のように足早に会社へと向かった。

午前一時、私は取引先へのプレゼンの資料などたくさんの仕事に追われていた。ひと息ついた私がふとデスクに置いてあるデジタル時計に目をやると、日付は十月十四日を示していた。私に、呆れたようなそして嬉しいような笑みがこぼれる。

「良かった。今日も私は生きている」